

中国の都城のプランからみる日本の都城制の源流

王維坤

西北大学国際文化交流学院
国際日本文化研究センター

1 漢代以前の都城のプランと皇帝陵

中国古代の文字は、象形文字と呼ばれている。「王権と都市」の核心は、「国」であろう。古代の「国」という文字は、勿論、「国」の象徴だと思う。しかし、この「国」という字は、時代によって書き方も随分異なっている。現在まで、合わせて「或」「國」「囿」「国」の四つの書き方がある。私の研究によると、「國」は、実際、昔からこの「或」という象形文字から始まったと言える。この字の意味とは、1人の人が「戈」の兵器を持って、「口」（國を示す）を守るということを表す。さらに言えば、『孟子・公孫丑下』に曰く「三里の城，七里の郭」から、囗を書くと、「回」字の形になる。この「回」の内側の「口」の部分は、いわゆる「城」、「宮城」を表し、外側にある「口」の部分は、「郭（廓）城」（羅城とも言う）を表す。郭城は、日本では中国と同じように、「羅城」とも言う。そのために、日本平城京の正門は、「羅城門」と呼ぶわけである。

はじめての「國」の字は、このような「或」という字を書くが、羅城が登場すると、宮城の外側をもう一周の城壁で囲むことの出現に従って、このような「國」の字へ変わった。この「或」という文字は、出土した文物に見ることができる。

ここであげるものは、20世紀50年代に河南省鄭州で出土した一件の商代前期の青銅戈である¹（図1）。この上にある象形文字を拡大すると、図2の文字になるだろう。その四面にある「三角形」の表現は、門楼の屋根を表したものだと思う。亡くなった有名な文字研究者である唐蘭先生の考証によると、この字は「鄘」という字である。すなわち、「墉」字の異体字であり、意味は「城壁」を表すということである。なお、許慎の『説文解字』巻13下の記載によると、「墉，城垣也。从土，庸声」とある。この唐蘭先生の解釈は間違いとは言えないが、この字は「墉」よりもむしろ「郭」と解釈した方が良いと思う²（図2）。何故かと言うと、図4を見るならば、その字の意味が分かるからである。

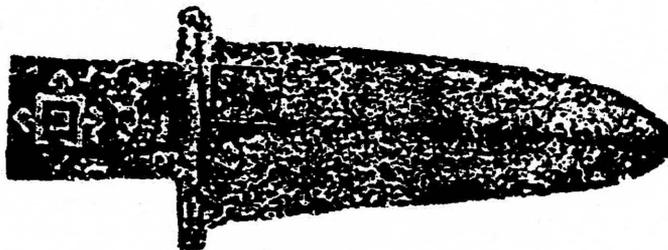


図1 河南省鄭州市出土の商代前期の青銅戈
(唐蘭「從河南鄭州出土的商代前期青銅器談起」『文物』1973年7期より)

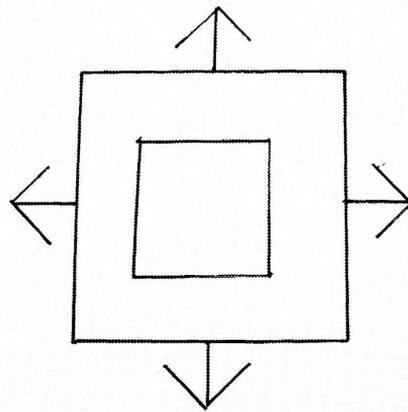


図2 「郭」字

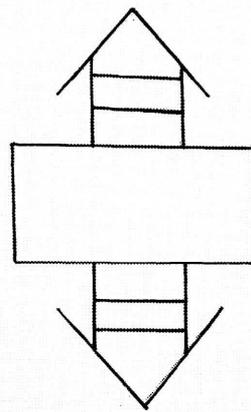


図3 「城」字 (王維坤自筆)

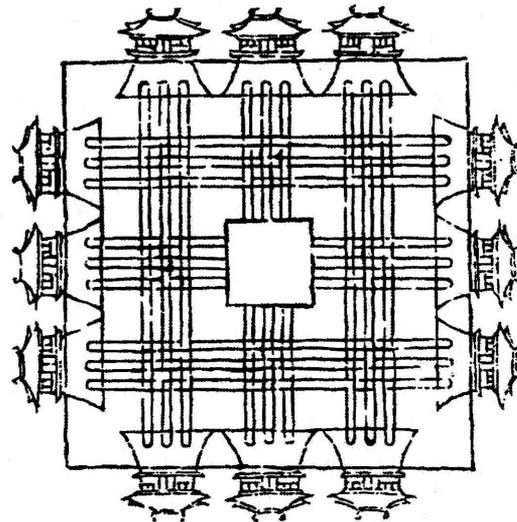


図4 「三礼図」の周王城図『周礼・考工記』
(劉敦楨主編『中国古代建築史』第2版 中国建築工業出版社 1984年 図23より)

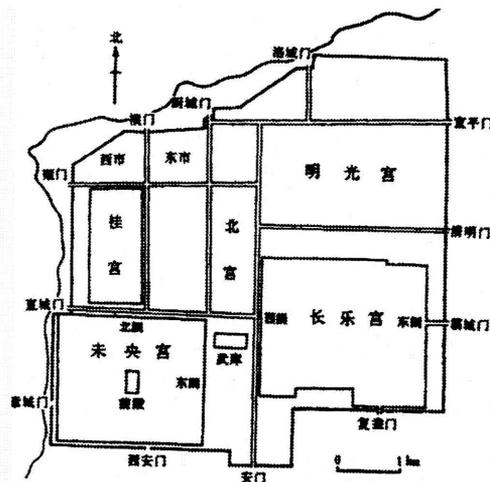


図5 前漢長安城のプラン

(中国大百科全書考古学編輯委員会『中国大百科全書・考古学』中国大百科全書出版社 1986年 第159頁より)

中国の「城」字は、甲骨文と金文（青銅器の文字）では図3のように書いた。この文字は、図2の文字と、非常に似ているが、まったく同じであるとは言えない。一番異なる点は、真ん中の部分である。つまり、中にある小さい枠は「内城」（宮城とも呼ぶ）を表し、外にある大きな枠は「外郭」（羅城とも呼び）を表した。このプランは、ありのままに早期の「城」「郭」という原始状態を示したものであると言える³。

中国の考古学発掘資料から見ると、古代の都城制は、大体このようなプランである。しかし時代の流れに従って、正方形のプランは長い間、あまり変わらなかったが、宮城の数が相当に増えたことは、事実だと思う。

いま私が一番気になるものは、前漢時代の皇帝陵は何故、地上の墳丘を「台形」（中国では「覆斗形」とも呼ぶ）として、地下の墓穴を正方形のプランとしたのか、という点である。私の初步研究によれば、この陵墓制度が前漢長安城のプランとかなり密接的な関係があると思う⁴（図5）。換言すると、皇帝が黄泉の国へ行けば、生前の世界とまったく同じのように暮らしたいという意識と信仰があったであろう。最近、秦始皇帝陵の探査によって、大きな発見があり、これは司馬遷が書いた『史記』の記録と一致するものであった。

しかしながら、今まで、中国の考古学者あるいは日本の考古学者にかかわらず、都城の研究者は都城制だけを研究する、古墳の研究者は古墳しか研究しない、という傾向があった。この研究状態と研究方法では、両者の間の関係を解明することは不可能だと思う。五年前の2004年9月から、私は京都大学人文科学所の客員教授として招聘され、受入教授富谷至先生と一緒に半年の期間、共同研究することになった。その時、私が唐代乾陵陵寝（墓室）制度について検討し、7万字の長さの論文を書いた。結論を言えば、乾陵の墓室は隋唐長安城の制度を模倣して、前室と後室という二つの墓室を造った。前室とは長安城の「皇城」に相当し、後室とは長安城の「宮城」に相当することを論証した⁵。

2 三国両晋南北朝の都城のプランと陵墓制度の変化

三国から南北朝まで、社会の激しい変革と変化がなされた時期であり、都城の制度とプランも、すっかり変わった。私が一番注目したいことは、この時期の陵墓制度も、都城の制度の変化に従って、変化したという点である。

まず、曹魏の鄴北城をはじめこの時期の都城の制度は、少なくとも、五つの特徴を持つ。その一は、宮城の位置を全体の中央から北の中央へ移したことである。その二は、都城のプランが正方形から東西長方形あるいは南北長方形へ変化したことである。その三は都城の真ん中に「中軸線」となる大街が出現したことである。その四は、都城における「里坊」という制度が登場したことである。例えば、曹魏の鄴北城には、「長寿」「吉陽」「永平」「思忠」の四里がある。その五は、都城の方向は宮城を北に置いて、南に向いたことである⁶（図6と図7）。

1994年9月から1995年1月まで、陝西省考古研究所と咸陽市考古研究所は咸陽市底張鎮陳馬村東南部にある北周の武帝（宣政元年、578年に埋葬）と皇后阿史那氏（隋の開皇二年、582年に埋葬）の合葬陵である孝陵に対して、共同発掘を行った。この墓は68.4メートルの長斜坡墓道・五つの過洞・五つの天井・四つの小龕（「壁龕」とも呼ぶ）・甬道・土洞単室墓・後龕という七つ

の部分からなっていた⁷。この単室墓は、たぶん曹魏の鄴北城をはじめ一つの「宮城」という都城の制度と何か関係があると考えている。

特に注目することは、ソクド人も、「郷に入らば、郷にしたがえ」と、中国の埋葬習俗に従って埋葬したことである。2000年から2005年まで、陝西省考古研究所と西安市文物保護考古所が前後して4基の北周時代の外国人の墓を発掘した。2000年5月に、陝西省考古研究所は、初めて西安市北郊外で一基の北周時代に属するソクド人安伽という人物の墓（大象元年、西暦579年）を発掘した⁸。その後、2003年6月と2004年4月、西安市文物保護考古所は、また同じ墓地で、北周時代のソクド人史君墓⁹（図8）と康業墓¹⁰を発掘した。

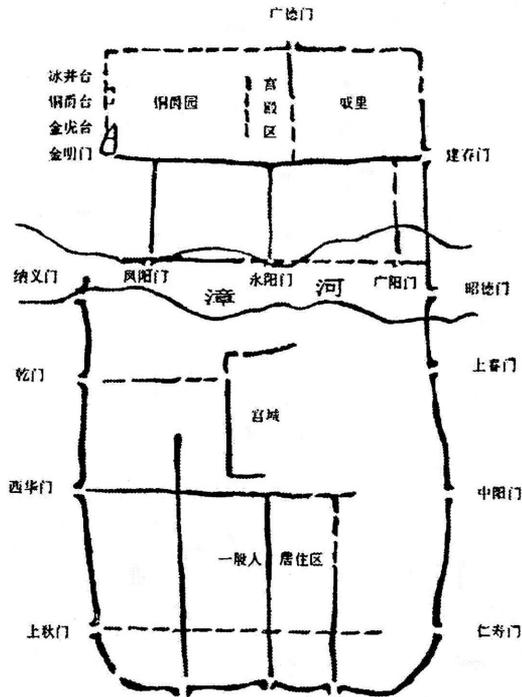


図6 曹魏の鄴北城と東魏・北齊の鄴南城

（徐光冀「東魏・北齊鄴南城朱明門跡の調査と研究」奈良国立文化財研究所・中国社会科学院考古研究所『日中共同研究会・日中都城研究の現状Ⅱ』1993年3月18日に奈文研にて。この図は徐光冀先生の発表資料に基づいて加筆）

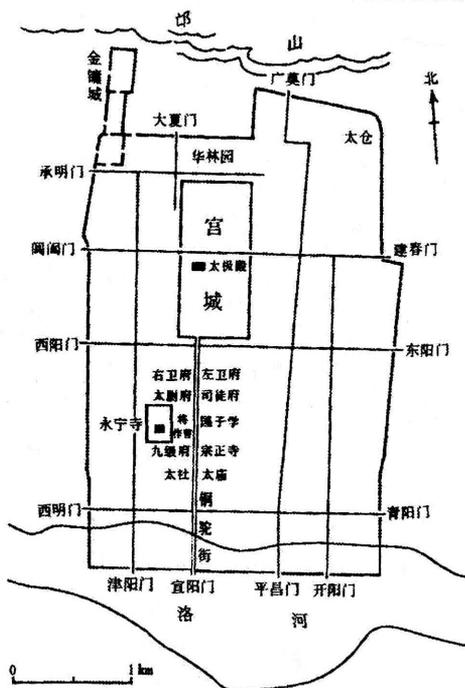


図7 北魏洛陽城のプラン

（中国大百科全書考古学編輯委員会『中国大百科全書・考古学』中国大百科全書出版社 1986年 第182頁より）

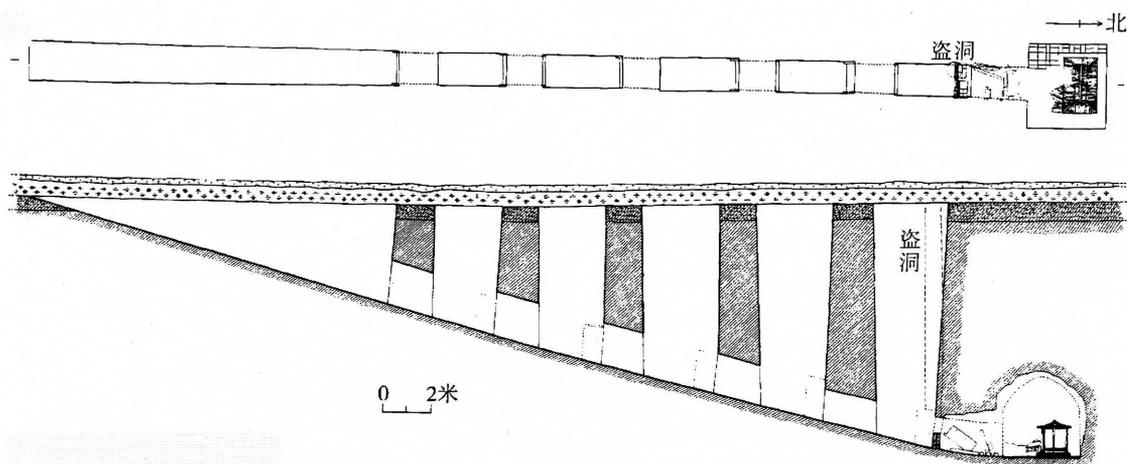


図8 北周のソクト人史君墓の平面図と剖面図
 (西安市文物保護考古所「西安市北周史君石椁墓」『考古』2004年第7期より)

また2005年9月、西安市北郊外にある南康村の農家が施工しているところで、偶然に北周時代の古代インド人（罽賓国 kasmira とする、古代の西域国名。都城は南北朝には善見城であり、今の克什米爾〔インド北西部カシミール〕スリ那加の附近に位置し、今もパキスタンとインド両国の紛争に属する地域でもある）婆羅門后裔の李誕墓¹¹を発見した。これらの外国人の墓は、いずれも単室に属する墓である。

3 隋唐長安城の都城プランと日本平城京の都城プランの比較研究

周知のように、平城京は710年から794年までの奈良時代の都である。奈良時代は、「遣唐使」の時代とも言う。奈良文化とは、実際、「遣唐使」を通じて、都城を含む色々な唐の文化に習って創造された素晴らしい文化である。「遣唐使」の派遣がなければ、素晴らしい奈良文化の創造はできなかつたと言えるだろう。710年に遷都した平城京は、古代日本の代表的な都城であると思う。それでは、平城京の中国のモデルの原型は隋唐長安城であるかどうか、という問題を比較研究したいと思う。

1) 日本の古代都城のモデルの原型に関する研究史

日本の古代都城のモデルの原型については、中日の学界では、20世紀の初めから比較研究が始まった。今に至るまで、100年以上の学術論争の歴史を持ち、主に三つの説が存在している。

第一の学説は、実際、1907年に関野貞先生が提案した学説である。関野先生は中国の隋唐時代の都であった長安城（図9）・洛陽城（図10）と日本の平城京を比較して長安城が日本の都城のモデルとなった可能性が高い、という説を提案した。つまり、関野先生の学説を一言で言えば、日本の平城京のモデルは隋唐の洛陽城ではなく、隋唐・長安城であるとするものである¹²。



図9 隋唐長安城のプラン
 (王維坤著『中日の古代都城と文物交流の研究』朋友書店 1997年 図12より)

それから、1978年に、北京大学の有名な考古学者、私の指導教官宿白先生は第二の学説を提案された。宿白先生の論文は『考古』1978年第6期に掲載されている。論文のテーマは「隋唐長安城と洛陽城」である。宿白先生の学説が関野貞先生と異なるところは、日本の平城京のモデルは、隋唐・長安城だけではなく、洛陽城も含まれているという学説である¹³。具体的に言うと、平城京のモデルは長安城と洛陽城の両方の優れたところを混ぜて模倣した都であるという学説である。

20世紀90年代に入ると、1986年に亡くなられた京大の名誉教授、榎原考古学研究所の前所長岸俊男先生からも、新しい第三の学説が提案された。この先生は考古学の専門家ではなく日本史の専門家である。私が1986年に同志社大学に留学したとき、実は岸先生の授業を登録したが、

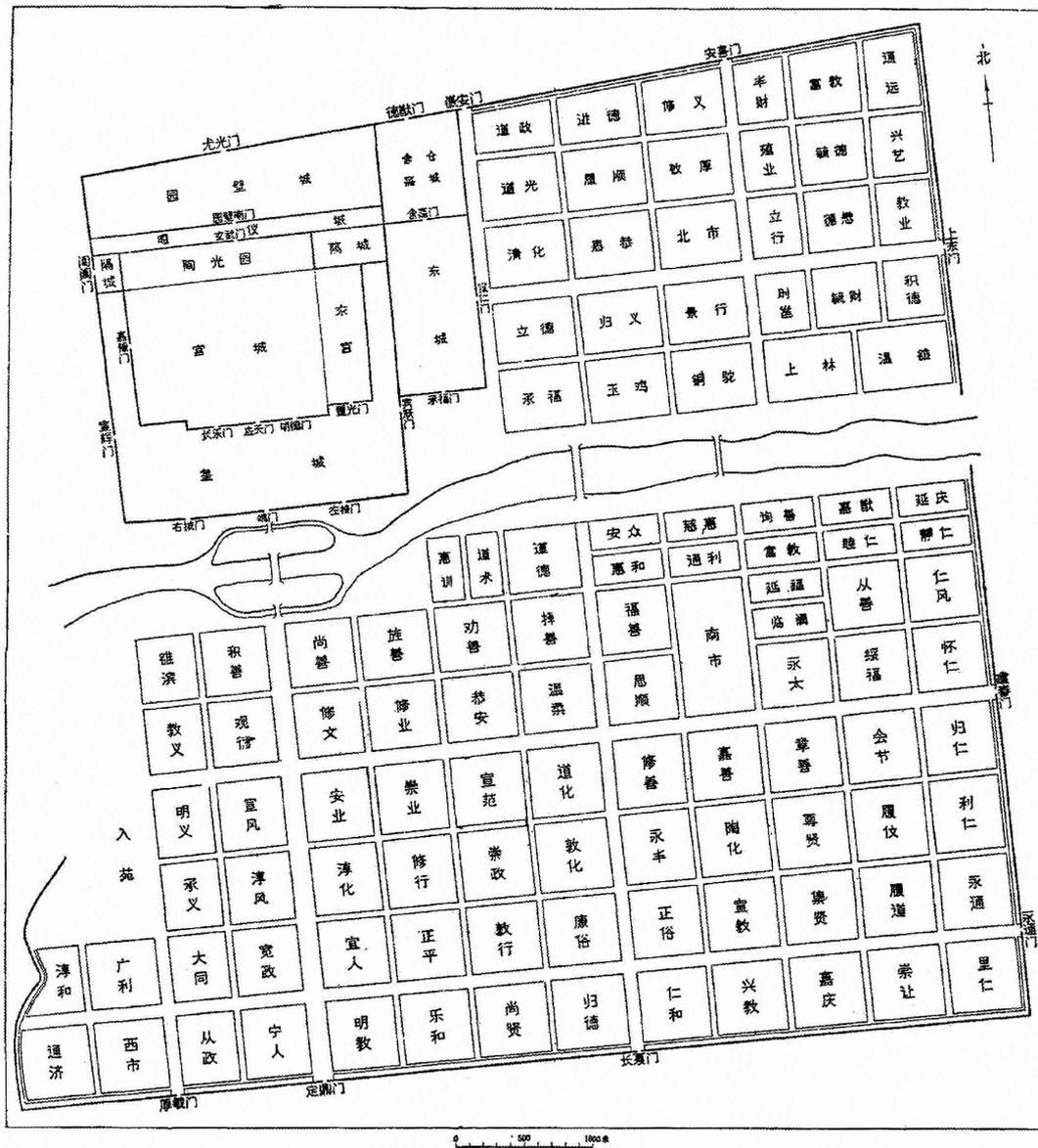


図10 隋唐洛陽城のプラン
 (奈良文化財研究所『日中古代都城図録』2002年 第172頁より)

岸先生が急に病気で入院されて私は会うことが叶わぬまま亡くなられた。私はいまでもそのことを思い出して、本当に残念に思っている。岸先生の第三の学説は、第一、第二の学説と比べると随分異なる。岸先生の研究によると、日本の平城京と藤原京の都城のモデルはいずれも隋唐時代の都ではなく、ずっとそれ以前の3世紀から6世紀の間の三国両晋南北朝時代の都が日本の都城のモデルである、と考えたのである。特に日本の都城の藤原京と平城京との間には、先生の研究によると非常に密接な関係がある。一言でいうと、「藤原京は、実際に平城京の原型であり、後者はただ前者が場所を移動し、面積を拡大したものにすぎない」¹⁴ということである。岸先生のこの新しい説が成り立つかどうかは別として、岸先生がよく工夫を重ねてこのような研究をされたことに感謝している。ただし1997年以来、藤原京域の東側と西側が発掘されるにしたがって岸先生の学説は、だんだん弱くなった。即ち、藤原京の面積は、岸先生の復元の範囲よりも広

くなることが分かった¹⁵。

2) 私の中日の古代都城に関する比較研究

ここから、第二の問題に入る。これは、私の中日の古代都城に関する比較研究である。主に次の方面から比較研究をしたいと思う。

(1) 中国の宮城・皇城と日本の内裏・大極殿・朝堂院

第1の問題は、「中国の宮城・皇城と日本の内裏・大極殿・朝堂院」の比較研究である。中国の隋唐・長安城の場合、いわゆる「宮城」・「皇城」は、日本の「内裏」・「大極殿」・「朝堂院」という部分に相当する(図11)。隋唐・長安城の配置では、中央の北側に宮城があり、その南側に皇城があり、一番外側にあるものが外郭城(羅城)である。隋は建国直後の開皇二年(582年)、新しい都城を作り始めて、8箇月で完成した。はじめはそのまま北周時代の長安城に居住していた。隋の文帝は皇帝になる前には、「大興公」という高官の地位だったので、彼が皇帝になってから都のどのような名称にも「大興」という名前を付けて呼んだ。例えば、都城を「大興城」、宮城を「大興宮」、苑林を「大興苑」と呼んだのである。だからこそ、隋時代には、いろいろな名称の前に「大興」の名前を付けたのである。唐代に入ると、その都城の名称は「長安城」と改称された。「長安」という名前は、今に至るまでよく使用されている。実際には「隋・大興城」、「唐・長安城」と区別して呼んだほうが良いのであるが、多くの研究者はよく「隋唐・長安城」と呼んでいる。両者の名前は少し違うが、都城のプランには違いはなかった。重要であることは、582年に、「皇城」という新しい施設が登場したことである。「皇城」はその名の示すとおり皇帝のために造ったものであり、これは皇帝が政務をさばき、大きな祭祀を行なった場所である。現代の言葉でいうと、皇帝の事務室である。隋時代以前には、都城は宮城と外郭城だけがあったのであるが、皇城はなかったのである。

しかし、注目すべきは、時代の流れに従って都城のプランが変わることである。つまり、商周時代には、宮城の位置は中央に置かれているが、三国両晋南北朝に入ると、宮城の位置は真ん中からだんだん北側の方へ移動する、特に隋唐時代に入ると、完全に郭城の北側に固定された。そこで、宮城の位置は北側にあり、その南側に皇城という新しい都城制度が誕生した。平城京の場合には、それぞれ「内裏」・「大極殿」・「朝堂院」という名前で呼んでいる。中国の場合には、おのおの「宮城」・「皇城」という名前で呼んでいる。両者の名前はもちろん違うが、その都城の制度は全く同じである。例えば、唐・長安城の皇城の南正門は朱雀門であり、平城京でも朱雀門である。隋唐長安城の宮城の北門は玄武門である。なぜかと言うと、このような城門の名前は、四神思想と密接な関係があるからである。

さて、日本の平城京と平安京では、「内裏」の中心建物に属する「正殿」を「大極殿」という名前で呼んでいる。中国でも「太極殿」という名前である。日本の古代には「太」と「大」の意味は同じ意味で、よく通用しているので、日本の平城京の「大極殿」と中国の隋唐・長安城の「太極殿」は全く同じであると言える。なお、日本の平城京の「内裏」(「大内」と「大内裏」とも称する)は、一番奥の宮殿を指す意味である。中国の昔にもそういう名前があったので、この平城京の「内裏」と唐長安城の「西内」・「大裏」・「内朝」という名前は大同小異であると考えている。ここで、注意しなければならないことは、隋唐長安城と隋唐洛陽城はその設計者が同じ人物宇文

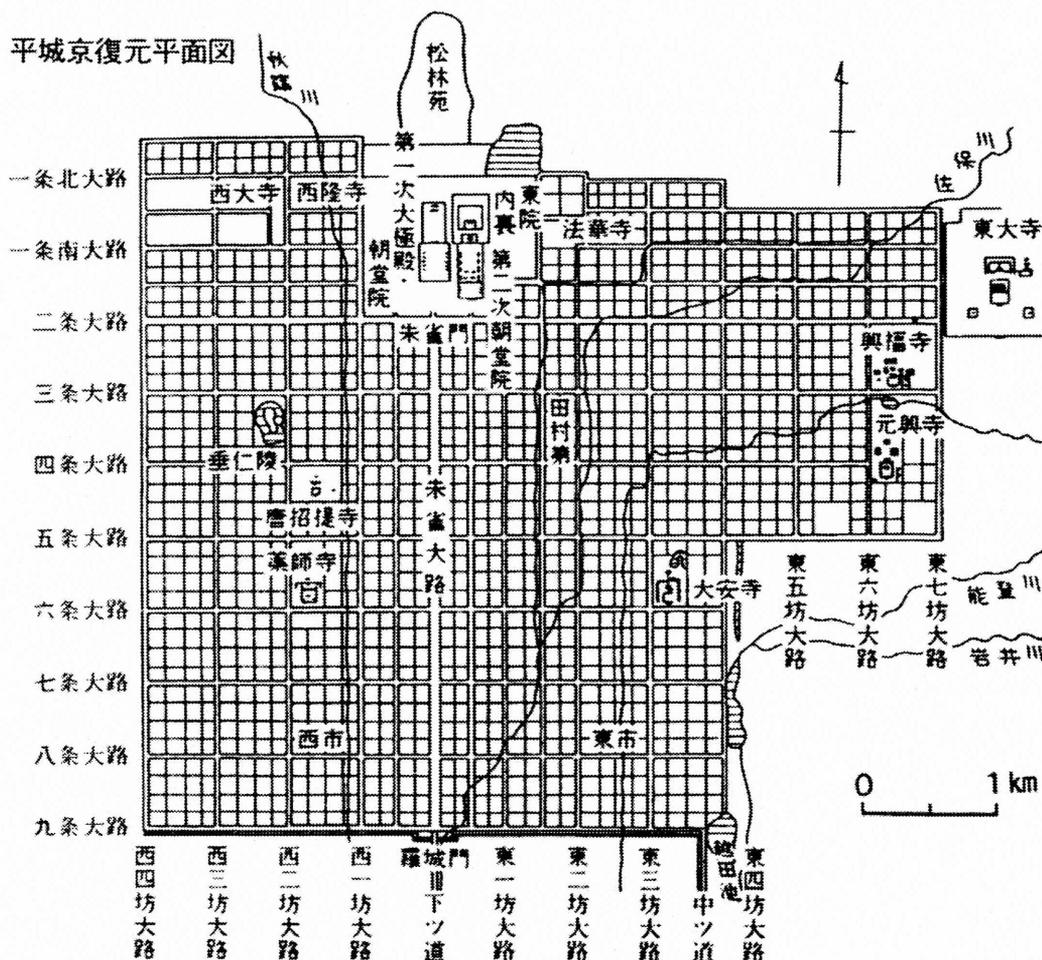


図 11 日本の平城京のプラン
 (王維坤著『中日の古代都城と文物交流の研究』朋友書店 1997年 図13より)

愷であるけれども、両者の「宮城」と「皇城」の位置が大きく異なることである。隋唐長安城の「宮城」と「皇城」の位置は、全城の北側にあるが、隋唐洛陽城の「宮城」と「皇城」の位置は、その都城の西北隅にある。これについて、宿白先生の研究によると、東都洛陽城の宮城と皇城の「このような配置は京城より一等低い配置であることがわかる」¹⁶ という解釈である。

研究によると、隋唐・長安城のこのような配置は「首都」レベルという類型であって、隋唐洛陽城の配置は「陪都」レベルという類型であったのではないかと思う。この配置から分析すれば、日本平城京の内裏・大極殿・朝堂院は、明らかに隋唐洛陽城における宮城と皇城の制度を模倣したのではなく、隋唐長安城のみを模倣したのであったと思われる¹⁷。

(2) 隋唐長安城の朱雀大街と日本平城京の朱雀大路

次は「隋唐長安城の朱雀大街と日本平城京の朱雀大路」の比較研究である。中国の中で一番広大な都城は、やはり隋唐長安城である。長安城の中央の道路（中軸線大街とも言う）である朱雀大街の幅は、150～155メートル余りある。日本の朱雀大路の幅は78メートルある。「大街」と「大路」は表現が少し違うが、「大街」は大きな道を表し、「大路」も大きな道を表す。だからこそ、「朱雀大街」と「朱雀大路」は全く同じであり、違うところはないと言える。なお、中国の都城

において「朱雀大街」という名前の道は、隋唐長安城だけに存在し、隋唐長安城以外の都、例えば洛陽城にはそのような名前の道はなかった。だから、平城京の「朱雀大路」は隋唐長安城の「朱雀大街」を模倣して造ったはずだと思う。とにかく、平城京のモデルの原型は隋唐長安城であり、それ以外の都城ではありえないというのが私の結論である¹⁸。

(3) 隋唐長安城の十列の里坊と日本平城京の東・西の四坊大路

第3は「隋唐長安城の十列の里坊と日本平城京の東・西の四坊大路」の比較研究である(図9)。隋唐長安城の里坊の配置は南北13条で、東西10列である。例えば、朱雀大街の両側、即ち皇城の南側には、南北方向の4列の里坊を配置しているのである。なぜ4列の里坊を配置するのかと言うと、これが中国の文献である清・徐松『唐兩京城坊考』ではそれぞれ一年の四季(春夏秋冬)を表すのである。そういう文献記述があるが、私はこの記録は信用できないと思う。なぜ信用できないかと言うと、やはりこの資料が史実ではなく伝説だからである。しかしながら、中国都城の里坊はこのように図を書けば非常に書きやすく、覚えやすい。例えば、東西が4列で南北が9条、4掛ける9は全部で36里坊になる。なお、皇城以南の9条とその北側の4条を足すと13条になる。これが中国の古代文献の中では「一年閏有り」ということを表す。つまり、一年間は12ヶ月であるが、閏月がある場合には、12足す1=13となる。そのため、北側から南側まで合わせて13条の里坊という配置になったと言える。

注目すべきことは、日本平城京の朱雀大路の両側には立派なきちんとした小さい道によって4列を配置するとともに、その左右側にはそれぞれ3列を配置している。これらは隋唐・長安城の列の数を比べれば、ほとんど同じ列の数である。しかし、平城京の東一坊大路と東二坊大路との間には1列だけの小さい道が多かったのである。これはたぶん後で造った道であると思うので、平城京の中心部分の里坊の数は隋唐長安城の里坊を模倣した可能性が高いと、私は考えている。なお、隋唐の洛陽城の里坊の配置は平城京の里坊を比べれば、同じところがないので、平城京の里坊の配置は隋唐の洛陽城を模倣した可能性はなさそうである。

(4) 隋唐長安城の里坊の区画と日本平城京の里坊の区画

第4は、「隋唐長安城の里坊の区画と日本の平城京の里坊の区画」の比較研究である。隋唐長安城の里坊の区画には、二つの類型がある。即ち「二区」と「十六区」である。隋唐長安城の里坊の「二区」の場合には、これらの里坊の内部は一本の小路によって「日」字という形の里坊を設計し、里坊の内部ごとに一本の東西方向の小路と東・西門だけがある。注意しなければならないのは、首都の36里坊の内部には、北門と南門を開ける例が全くなかったことである。なぜ北門と南門を開けなかったのかと言うと、これは皇帝の安全のために、わざわざ北門を開けない方を設計したのである。もし、里坊の北門を開けると里坊に住む人びとが暴動をおこすと、北門から直接に皇城に入るだろう。だから里坊の北門を開けなかった。中国の北宋・宋敏求『長安志』の中には、その原因を詳しく書いてある。これらの里坊は、「宮城の直南(真南)にあれば、(隋の文帝)北街を開きて気を洩らし以て城闕を衝かんことを欲せず」となったために、「坊ごとにただ東西二門を開かしむ」ことになったというわけである。将来、平城京には北門を開けなかったという事実が発見されれば、平城京が隋唐長安城の禁門制度を模倣した新しい証拠になるはずである。

それでは、次の隋唐長安城の里坊の「十六区」の問題に入る。即ち、隋唐長安城の「十六区」

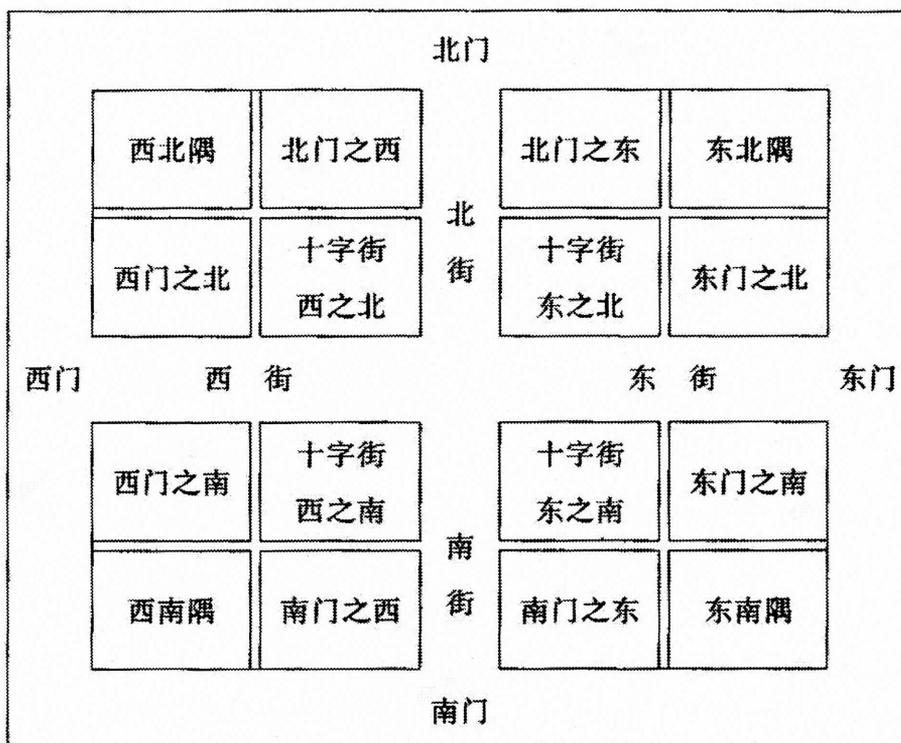


図12 隋唐長安城の里坊の「十六区」
 (宿白「隋唐長安城和洛陽城」『考古』1978年第6期より)

と日本平城京の「十六坪」(十六町とも称する)の比較研究である。とにかく、十六区と十六坪とは、中国の里坊制と日本の条坊制である。

先に述べた皇城以外の南側の4列の里坊は、里坊の内部の一本の東西小路によって「日」字という形にした里坊である。しかし、これらの里坊はこれ以外の里坊の配置と随分異なる。図12は、北京大学の宿白先生が考古学発掘資料と文献史料によって作成した里坊復元図である。まず「十字路」の道路によって区画され四区となり、それからさらに四つに区画され全部で十六となるわけである。日本の条里制の場合には、それぞれ第一坪、第二坪、第三坪、……第十六坪というふうに呼んでいたのである。私の研究によれば、平城京の「十六坪」という条坊制は、直接に隋唐長安城の「十六区」という里坊制を模倣したとするのが正しいと思う。中国の都城の里坊では、隋唐長安城だけがそのような「十六区」という里坊がある。だからこそ平城京の条坊制はもし中国の里坊を模倣したとするならば隋唐長安城の里坊しかないと考えている。ただ、隋唐長安城の里坊はそれぞれ名前があり、それが平城京の条里制の名称と随分異なることは否定できないと言える。しかし、この里坊の区画から分析すれば、日本の平城京の里坊は隋唐洛陽城の「四区」という里坊制度を模倣した可能性はなさそうである。

(5) 隋唐長安城の東市・西市と日本平城京の東市・西市

第5の問題は「隋唐長安城の東市・西市と日本平城京の東市・西市」の比較研究である。隋唐長安城の場合には商業市場が二つある。その場所がそれぞれ皇城以外の東南方と西南方にある。隋代には東南方の商業市場は「都会市」という名前呼んでいた。西南方の商業市場は「利人市」という名前呼んでいた。注目すべきことは、隋代にはこの二つの市場はその位置が左右対称で

あり、その規模もまったく同じである。唐代に入ると、場所は変わらずに、その名前だけが変わった。東側の市場は「東市」と改名し、西側の市場は「西市」と改名した。この市場は、当時の隋唐長安城の中で最も栄えた商業区であった。外国で流行した色々な物があったばかりでなく、美味しい食物（胡餅）もあった。古代の文献によると、多くの中央アジア人と西アジア人は、唐・長安城の西市に集まって商売をしたのである。例えば文献の中に書かれた歌舞音曲などの芸事をよくする「胡姬」の記録などが残っている。

平城京の場合も二つの市場があって、それぞれ「東市」と「西市」と呼んでいた。市場の名前は同じであったばかりでなく、その位置も対称的なものであった。だから平城京の「東市」と「西市」は、隋の大興城における「都会市」と「利人市」を模倣したよりもむしろ直接に唐・長安城の「東市」と「西市」の名称と位置を模倣したと見る方が良いと思う。上述したように、618年に改名された唐・長安城は、実際には582年に建てられた隋の大興城に基づいて発展した都城であった。日本の平城京は、708年から造営が始まり、710年に正式に遷都したものである。この時期は、中国の唐代（618～907年）の前期に相当することになる。ここで指摘すべきは、この時期の中日の文化交流が一番盛んな時期であったことである。この時期の唐朝は、世界にも誇るべき国であった。そのため日本から多くの遣唐使を派遣し、全面的に中国のさまざまな文化を学んだ。これらの遣唐使が帰国すると、素晴らしい奈良文化を創造した。奈良時代の日本は、もし中国の優れた大唐文化を受け入れなければ、素晴らしい奈良文化を創造することがたぶん不可能だったと、私は思う。この点から言えば、隋唐洛陽城のいわゆる「南市」「北市」「西市」という三つの市場を模倣した可能性はなさそうである¹⁹。

(6) 唐・長安城の西明寺と日本平城京の大安寺

第6の問題は「唐・長安城の西明寺と日本平城京の大安寺」の比較研究である。平城京は、唐・長安城の都城制度を模倣するとともに、長安城にあったある寺院の建築風格さえも模倣していたのであった。例えば、平城京の「大安寺」は唐・長安城の「西明寺」という寺院を手本として建てられ寺院であった。日本の有名な道慈という学問僧はこの西明寺に18年間滞在しており、暇があると西明寺を対象として絵を描いていた。彼がこの絵を持って帰国した直後、日本の大安寺の建設を始めたので、日本の大安寺はこの絵をもとに設計して建てた寺院だと言われている。これは日本の寺院が中国の寺院を模倣した実例として一番良いと私は考えている。この大安寺に関する記録は、いま大安寺史編集委員会編『大安寺・史料』に収集されている。

(7) 唐・長安城の国子監と日本平城京の大学寮

第7の問題は「唐・長安城の国子監と日本平城京の大学寮」の比較研究である。国子監と大学寮は、現代の言葉で言うと、大学に当たる。国子監とは、もとは「国子学」と称した古代の中国において官吏を教育する機関であった。私たち考古学者は、この名前を手がかりとしてその場所を探したのである。日本の大学寮は、具体的な位置がまだ確認できないが、朝堂院に近いところで多くの木簡が出土した。その中に、大学寮と密接な関係のある木簡がある。これらの木簡から分析すると、大学寮の位置は、多分この付近にあるのではないかと思う。私は長安城の国子監の位置をも調べたが、両者の位置は全く同じである。他の都城の国子監の位置と比べれば随分異なるので、平城京の大学寮が唐・長安城の国子監を模倣した可能性が一番高いと考えている。私の推測が成り立てば、これも平城京が唐・長安城を模倣する例となる。

(8) 隋唐長安城の明德門と日本平城京の羅城門

それから第8の問題は「隋唐長安城の明德門と日本平城京の羅城門」の比較研究である。明德門は隋唐長安城の一番南側の外郭城の正門である。1980年代の初めごろ、中国社会科学院考古研究所西安唐城工作隊はこの明德門を発掘した。この門は5つの門道からなっているのである。真ん中の門道は、皇帝のために造られた「御道」という道であり、その両側には馬車の通る「車馬道」、さらにその外の両側には人々の通る「人行道」という道である。日本の平城京の場合では、一番大きな正門である羅城門を発掘した。この門道もやはり5つの門道からなっているのである。中国でも日本でも5つの門道を持つのは、隋唐長安城の明德門と日本平城京の羅城門しかないので、日本平城京の羅城門の5つの門道の制度が、その位置と規模から分析すると、間違いなく隋唐長安城の明德門を模倣したものであると、私は考えている。

(9) 隋唐長安城の大興苑・曲江池と日本平城京の松林苑・五徳池

次の問題は「隋唐長安城の大興苑・曲江池と日本平城京の松林苑・五徳池」の比較研究である。換言すれば、隋唐長安城の大興苑と曲江池は日本平城京の松林苑と五徳池の間に密接な関係があるので、合わせて検討したいと思う。隋唐長安城の場合に、なぜ外郭城の東南隅に「曲江池」を掘り開いたのか、ということについて、南宋・程大昌の『雍録』に次のように記されている。即ち「隋京城を営むに、宇文愷、其の地京城の東南隅にありて、地高く便ならず、故に此地を闕けて、居人坊巷を為さざるを以て、之を鑿ちて池を為し、厭を以て之に勝つ」ということである(図13)。

私の研究によれば、この池を設計する制度は、たぶん司馬遷の『史記』の中に書かれたいわゆる「天西北に足らず、星辰 西北を移す、地 東南に足らず、海を以て池を為す」という影響を受けて「曲江池」を設計し、造った可能性が大きいと思う。しかし、隋唐長安城の地勢図から見れば、実際は東南隅の地勢が一番高く、西北のあたりが一番低い。高い所と低い所の高低差は50メートルという驚くべき数値である。だからこそ、長安城の東南隅にある「曲江池」とは、上述した理由で完全に人の手で掘り開いたものである。この問題を研究すればするほど面白くなる。中国の地図を全国的に見れば、西北の大部分の地域は高原と盆地を含む陸地、山脈などであり、ただ東南隅のあたりはいずれも海に面している。

なぜ長安城は東南隅に「曲江池」を掘り開いたのかと言うと、皇帝とは、古代には「天子」とも呼ばれていたのであった。それでは、なぜ「天子」と呼ぶのかと言うと、「天子」は実際、天の子供という意味である。換言すれば、「天子」は上の天の意志を代表し、下の人間を支配する者という「帝王」の意味である。だから皇権を象徴する首都である隋唐長安城は、そういう理念に基づいて、わざわざ東南隅のところに天体を模倣し「曲江池」を設計し造ったのである。これも、都城が天体を模倣し造ったただ一つの実例だと思う。

注目すべきは、日本は島々の国である。周囲は、いずれも海である。しかし、平城京の「越田池」(「五徳池」とも呼ぶ)を設計した際、隋唐長安城の「曲江池」と全く同じような東南隅の場所を選択し造ったのである。その位置から見れば、やはり後者の「越田池」が前者の「曲江池」を直接に模倣したことを、誰も認めざるをえないと思う。

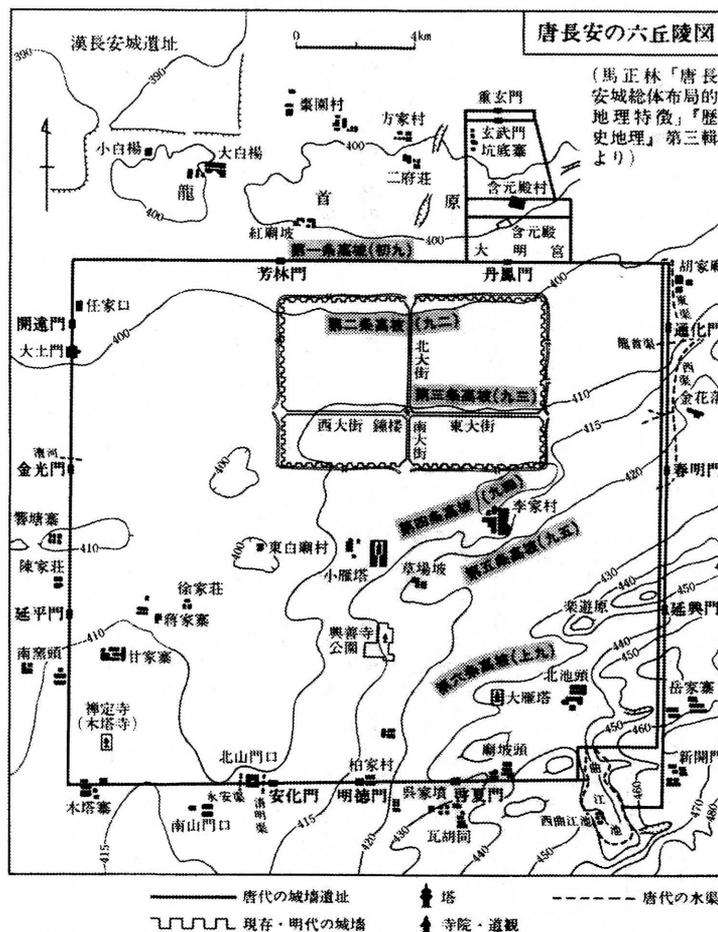


図13 隋唐長安城の地勢図
(岸俊男編『日本の古代9都城の生態』中央公論社1987年 図31より)

(10) 唐・長安城の大明宮と日本平城京の外京

第10の問題は、「唐長安城の大明宮と日本の平城京の外京」の比較研究である。大明宮は唐太宗の李世民が貞観八年(634年)に、高祖李淵の「清暑」(暑さをしのぐ)のために、東北隅にある「竜首原」という土の丘の有利な地形を利用して造ったもので、初めは「永安宮」と呼び、翌年から「大明宮」という名前に改名したのである。日本の場合には、長安城の竜首原に相当するところに市庭古墳があるので、そのまま東北隅の北側に「外京」を造るのは、明らかに不可能だと思われる。その代わりに「外京」を東側へ伸ばしたのである。だから平城京の外京は、唐・長安城の大明宮を参考にして造ったものだと、私は考えている。王仲殊先生が、1999年『考古』第3期に掲載された「日本の古代都城の宮内大極殿の龍尾道を論ずる」という論文は、私の以前に発表した見解とまったく同じである。即ち、『西北大学学报』1990年第1期と1991年第2期に掲載された私の論文である²⁰。ここで説明すべきは、「大明宮」は宮殿であり、「外京」は寺院であり、なぜ日本の寺院の用地は、中国の宮殿の用地を模倣し選択したのか、今では解釈できないことである。この問題は、私の今後の最大の宿題になると思う。

(11) 唐・長城京の龍尾道と日本平城京の竜尾壇

最後の問題は「唐・長安城の大明宮含元殿の龍尾道と日本平城京の竜尾壇」の比較研究である。

大明宮含元殿の龍尾道遺跡は、実際、馬得志先生が早くに1959年から1960年までボーリングで部分的に探査したことがある²¹。まず、建築専門家の郭義孚先生は、この考古発掘簡報によって龍尾道を含む含元殿の復元図を提示された（図14）²²。

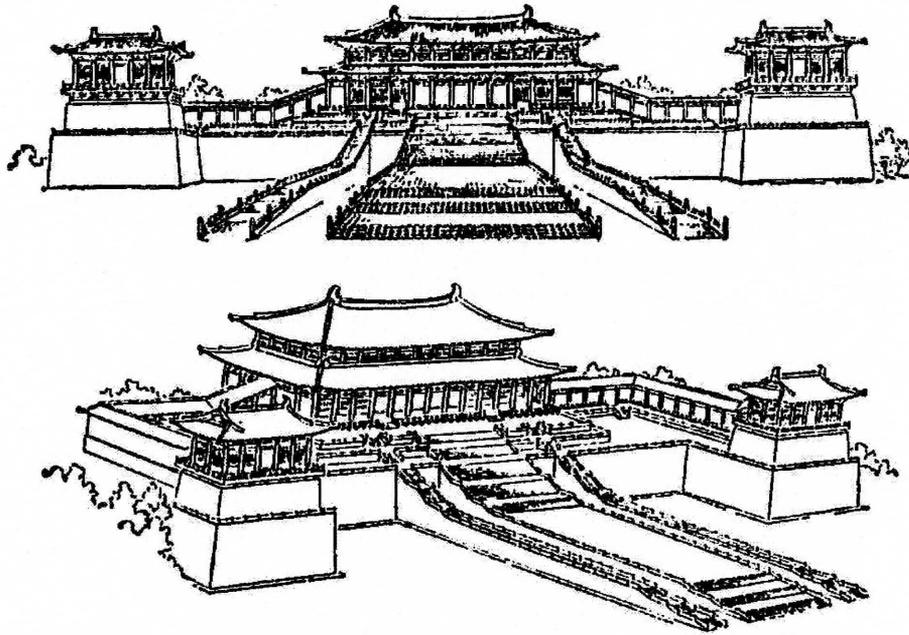


図14 含元殿外觀復元図
 (郭義孚「含元殿外觀復元」『考古』1963年第10期より)

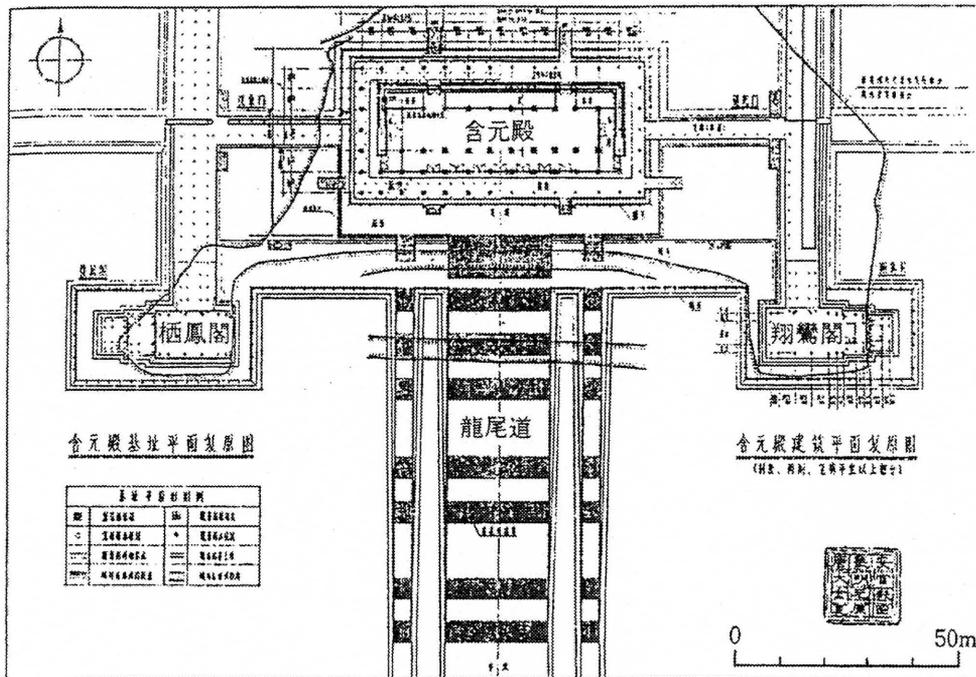


図15 含元殿の平面復元図
 (傅熹年「唐大明宮含元殿原状的探討」『文物』1973年第7期より)

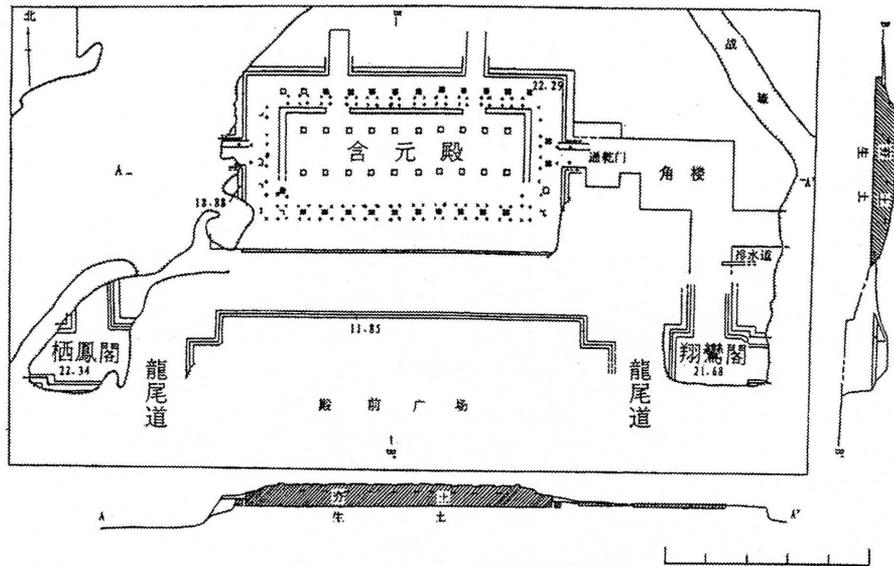


図16 含元殿遺跡の平面図と断面図

(中国社会科学院考古研究所西安唐城工作队「唐大明宮含元殿遺址1995～1996年発掘報告」『考古学報』1997年第3期より)

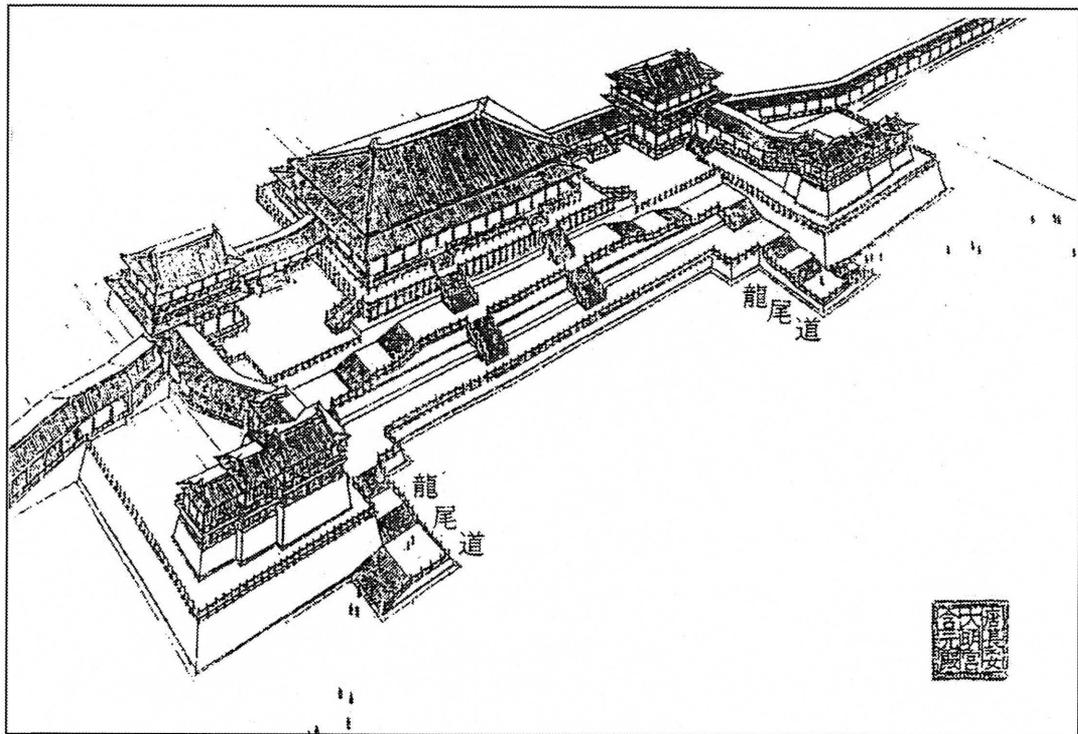


図17 含元殿の龍尾道改造以後の復元鳥瞰図

(楊鴻勳「唐大明宮含元殿復元研究」『慶祝蘇秉琦考古55周年論文集』文物出版社 1989年より)

ここで注目すべきは、傅熹年先生が1973年に復元された含元殿の平面復元図(図15)である。この復元図では、この建物の前の中央にある南向きの3本の立派な道路が復元され、それを「龍尾道」という名前で呼んでいたのである²³。ここで強調すべきは、中国社会科学院考古研究所西安唐城工作队が1995年から1996年にかけて全面的に含元殿遺跡を発掘し、以前の復元図と異なる新しい発掘成果を取得したのである²⁴。この新成果は、具体的に言えば、殿前の真ん中の部分

は殿前広場であり、いわゆる「龍尾道」ではないということになった。大明宮含元殿の「龍尾道」のもともとの位置は、実際、殿前の両側にある（図16）。その後、楊鴻勛先生も含元殿の復元図を提示された（図17）²⁵。今回の新成果は文献記録の「龍尾道」とまったく同じであることが一番注目されている。

私は、2007年7月21日に日文研における王共同研究会「古代東アジア交流の総合的研究」の第2回「古代東アジアの都市 1」共同研究会で「唐の長安城大明宮含元殿の発掘と龍尾道の復元——渤海の宮殿と平城京・平安京の宮殿から見る——」というテーマで発表した²⁶。

渤海の上京龍泉府の第二宮殿は唐・長安城の宮殿建築の影響を受けて建てられたものである。渤海の場合、いわゆる「龍尾道」が大きな宮殿の両側にあったことがその有力な証拠資料になった²⁷。また、20世紀80年代には、発掘された日本の奈良時代前半の大極殿院と恭仁遷都中の大極殿院は、その殿前にはいずれも中国の「龍尾道」に相当する「龍尾壇」がある²⁸。龍尾壇の「壇」とは、「土を盛り上げて作った高いところ」という意味である。このような建築は中国の言葉で言えば、「高臺建築」と言う。だから日本の平城京の「龍尾壇」は、唐の大明宮含元殿の「龍尾道」を模倣して造られたものであったと思う。しかしながら、平安京の「龍尾壇」²⁹のモデルは平城京の「龍尾壇」であって、唐・長安城の含元殿の「龍尾道」ではなかったと、私は堅く信じている³⁰。

しかし、本格的な含元殿遺跡の復元作業と総合的研究は、これから始まると言える。1998年、傅熹年先生が書かれた「対含元殿遺址及原状的再探討」という論文は、検討に値する多くの推論を提出した。その一、『旧唐書・五行志』の「(太和)九年四月二十六日の夜に、大風で含元殿の四つの鴟尾がすべて落ちた」の記載から分析し、含元殿の建築はその左右に挟屋を有し、その屋の上部に鴟尾をもつ建物に属する城楼があったと考えられる。その二、いままで確認された含元殿の平面の柱配置から見れば、その上部には重檐建築ではなく、単檐建築であろう。その三、新しく確認された柱の配置は、挟屋・四つの鴟尾・重檐建築という文献記載と違うため、いわゆる現存する遺址は隋代のものであり、唐代のものとするには疑義がある、としている。また、今回発見された龍尾道は、ある文献の「東階」「副階」「龍墀」とも違うであろうとも言う³¹。

昨年、私が大明宮含元殿の龍尾道を検討した時、かなり重要な文献史料と1枚の図版資料を見つけた（図18）。これが南宋・程大昌の『雍録』が引用する唐・韋述の『兩京新記』と五代・賈黄中の『談録』である。前者の唐・韋述の『兩京新記』の記載によると、「含元殿の左右には煉瓦造りの道が曲りながら上る。これを龍尾道という」記録がある³²。後者の五代・賈黄中の『談録』の記載によると、「含元殿の前の龍尾道は、平地からおよそ七回屈曲しており、丹鳳（門）から北を眺めると、そのうねった様子は地面に竜の尾が垂れているようであり、両端の（高）欄はいずれも青石で造られ、いまでも残存する石柱がある」という記録がある³³。これらの文献は、含元殿の「龍尾道」の復元のために、非常に価値のある資料を提供してくれた。しかし、図18の東側の「翔鸞閣」と西側の「栖鳳閣」の位置を誤ったことは、否定できないことである。この図から見ると、少なくとも含元殿の龍尾道の登る方・降りる方及び南入り口は楊氏の復元のようにそれぞれ東・西に向かっていたのではなく³⁴、いずれも南に向かっていたと推測している。

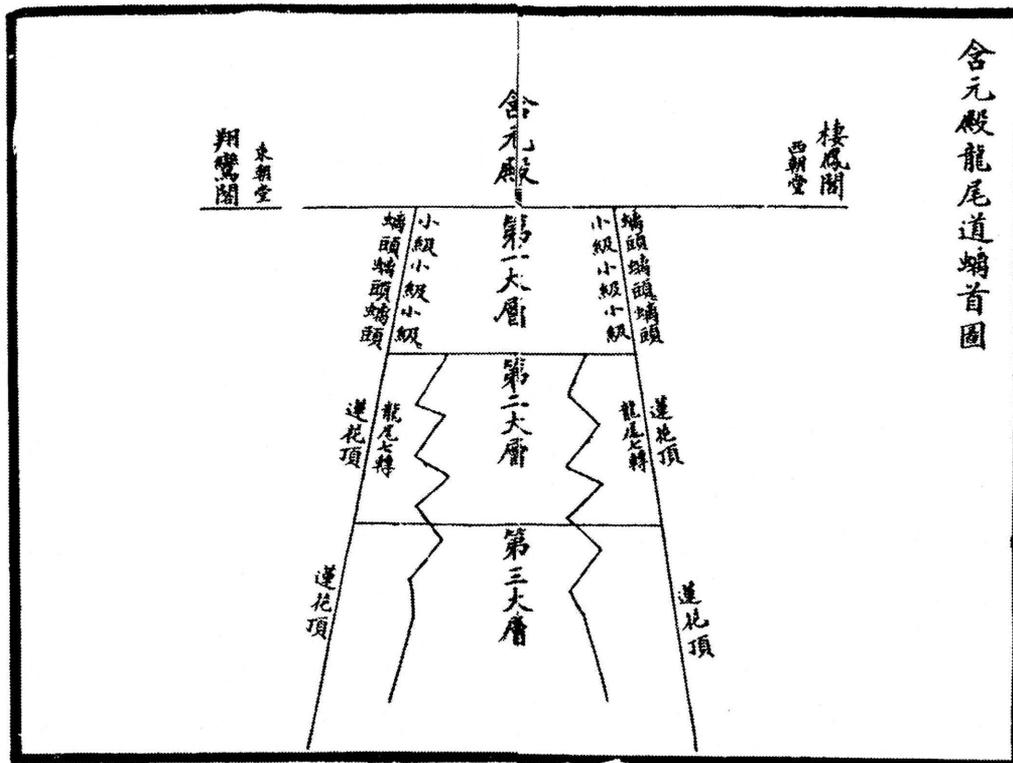


図 18 含元殿龍尾道螭首圖

(南宋・程大昌撰『雍錄』卷 3 (叢書集成統編 235) 新文豊出版会司 1988 年第 326 頁より)

3 結 論

以上に述べたように、私は十一の方面から唐・長安城と日本平城京という比較研究を通じて、私の研究結論を一言で言うと、日本の平城京のモデルの原型は、やはり唐・長安城しかなく、唐・長安城以外の都城は日本平城京のモデルの原型とすることは不可能だと、私は考えている³⁵。

(注)

- 1 唐蘭「從河南鄭州出土的商代前期青銅器談起」『文物』1973 年 7 期。
- 2 王維坤著『中日文化交流的考古学研究』陝西人民出版社 2002 年 第 34～35 頁。
- 3 劉敦楨主編『中国古代建築史』第 2 版 中国建築工業出版社 1984 年 図 23。
- 4 中国大百科全書考古学編輯委員会『中国大百科全書・考古学』中国大百科全書出版社 1986 年 第 159 頁。
- 5 王維坤「唐代乾陵寢制度の初歩研究」京都大学人文科学研究所『東方学報』第 77 冊 2005 年 第 440～377 頁。
- 6 徐光冀「東魏・北齊鄴南城朱明門跡の調査と研究」奈良国立文化財研究所・中国社会科学院考古研究所『日中共同研究会・日中都城研究の現状 II』1993 年 3 月 18 日に奈文研にて開催した。その時、私が通訳を担当し、本文の図は徐光冀先生の発表資料に基づいて加筆するものである。
- 7 陝西省考古研究所・咸陽市考古研究所「北周武帝孝陵発掘簡報」『考古与文物』1997 年 2 期。
- 8 a. 陝西省考古研究所「西安北郊北周安伽墓発掘簡報」『考古与文物』2000 年第 6 期。
b. 陝西省考古研究所「西安発現的北周安伽墓」『文物』2001 年第 1 期。
c. 陝西省考古研究所編著『西安北周安伽墓』文物出版社 2003 年 第 1 頁。
- 9 西安市文物保護考古所「西安市北周史君石椁墓」『考古』2004 年第 7 期。

- 10 西安市文物保護考古所編『前進中的の西安市文物保護考古所——慶祝西安市文物保護考古所建所10周年(1994—2004)』2004年 第40—42頁。
- 11 a. 程林泉・張小麗・張翔宇・李書鎖「陝西西安發現北周婆羅門后裔墓葬」『中国文物報』2005年10月21日第1版。
 b. 西安市文物保護研究所・程林泉・張小麗・張翔宇「談談對北周李誕墓的幾點認識」『中国文物報』2005年10月21日第7版。
 c. 李彪「北郊婆羅門后裔墓葬留下四大謎團」『華商報』2005年10月30日第5版。
- 12 関野貞「平城京及大内裏考」『東京帝国大学紀要』第3編 1907年。
- 13 宿白「隋唐長安城和洛陽城」『考古』1978年第6期。
- 14 岸俊男編『日本の古代9都城の生態』中央公論社 1987年。
- 15 橿原市千塚資料館『平成9年度特別展 藤原京——最近の調査成果より』井上印刷株式会社 1997年。
- 16 注(13)に同じ。
- 17 王維坤著『中日の古代都城と文物交流の研究』朋友書店 1997年。
- 18 注(2)に同じ。
- 19 王維坤・張小麗「論隋唐洛陽城的设计思想」『西北大学学报』2004年第4期。
- 20 a. 王維坤:『隋唐長安城与日本平城京的比較研究——中日古代都城研究之一』『西北大学学报』(哲学社会科学版) 1990年第1期。
 b. 王維坤:『日本平城京模倣中国都城原型探究——中日古代都城研究之二』『西北大学学报』(哲学社会科学版) 1991年第2期。
- 21 馬得志「1959～1960年唐大明宮發掘簡報」『考古』1961年第7期。
- 22 郭義孚「含元殿外觀復元」『考古』1963年第10期。
- 23 傅熹年「唐大明宮含元殿原狀的探討」『文物』1973年第7期。
- 24 中国社会科学院考古研究所西安唐城工作队「唐大明宮含元殿遺址1995～1996年發掘報告」『考古學報』1997年第3期。
- 25 楊鴻勛「唐大明宮含元殿復元研究」『慶祝蘇秉琦考古55周年論文集』文物出版社 1989年。
- 26 王維坤「唐の長安城大明宮含元殿の發掘と龍尾道の復元——渤海の宮殿と平城京・平安京の宮殿から見る——」2007年7月21日(土)日文研王共同研究会『古代東アジア交流の総合的研究』の第2回「古代東アジアの都市 1」共同研究会『古代東アジア交流の総合的研究報告書』朋友書店 2008年(出版予定)。
- 27 東方考古學叢刊・甲種第五冊『東京城』(渤海国上京龍泉府址の發掘調査) 東亜考古学会 1939年 『東方學考古學叢刊・甲種刊行會編』『東京城』雄山閣 1981年。
- 28 田中琢『古代日本を發掘する3 平城京』岩波書店 1984年
- 29 角田文衛『日本の後宮』学燈社 1983年。
- 30 王維坤「唐長安城における大明宮含元殿の發掘と新認識」(森浩一 松藤和人編『同志社大学考古學シリーズ VII 考古學に学ぶ—遺構と遺物』) 1999年。
- 31 傅熹年「對含元殿遺址及原狀的再探討」『文物』1998年第4期。
- 32 南宋・程大昌撰『雍錄』卷3が引用する韋述の『兩京新記』によると「含元殿左右有砌道盤上、謂之龍尾道」とある。(叢書集成統編 235) 新文豐出版會司 1988年 第326頁。
- 33 南宋・程大昌撰『雍錄』卷3が引用する賈黃中の『談錄』にも「含元殿前龍尾道、自平地凡詰曲七轉。由丹鳳(門)北望、宛如龍尾下垂於地。兩垣欄悉以青石為之、至今石柱猶有存者」とある。(叢書集成統編 235) 新文豐出版會司 1988年 第326頁。
- 34 注(25)に同じ。
- 35 注(26)に同じ。

Origins of the Japanese System of Capital Cities, Seen in Chinese Capital City Plans

WANG Weikun

*School of International Cultural Exchange, Northwest University, China
International Research Center for Japanese Studies*

Ancient Chinese characters are called hieroglyphs, or pictographs. Among the characters associated with the notion of cities, *koku* (the character 國, pronounced *guo* in Chinese) is particularly notable. Ways of writing this character have varied considerably over the ages. Four different forms that have appeared are—to give first their Japanese, then their Chinese readings— *waku* 或 (Ch. *huo*), *koku* 國 (Ch. *guo*), *koku* 圀 (Ch. *guo*), and *koku* 圉 (Ch. *guo*). The meaning of the hieroglyph for the first of these, *waku* 或, can be deduced by breaking the hieroglyph into its elements: it shows one man 人 with a halberd 戈 who is defending a defined territory 口. Another way of explaining this is to refer to the city plan described by Mencius in his Gong Sun Chou chapter, Part Two; Mencius says, “There is a city, with an inner wall of three li in circumference, and an outer wall of seven” (translation from Mengzi 孟子 [*The Works of Mencius*], online at <http://chinese.dsturgeon.net/text.pl?node=1638&if=en>). This is exactly the form of a *koku* 國 (country or defined territory) that is depicted by the character *kai* 回 (Ch. *hui*). The smaller enclosure in the center of this character represents the palace, and the larger enclosure represents the exterior walls of the walled city. We can say that the city had its origins in the form suggested by the plan depicted in the Chinese character *waku* 或. Comparative research on the cities of East Asia enables us to conclude that Heijōkyō, the ancient capital city of Japan, was built on the model of Chang’an, the capital of the Sui and Tang dynasties, and these ancient cities both expressed and reinforced the notions of kingly power that prevailed at the time.